
兎ぐるむ熊ぐるむ

トカゲ

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

兎ぐるむ熊ぐるむ

【Nコード】

N6643B

【作者名】

トカゲ

【あらすじ】

寂れた遊園地でマスコットのバイトに励む瑠香と日々輔。その日集った客は迷子の子供。メリーゴーランドの前で子供を待ち続ける夫婦。日々輔の母親。そして赤い髪の男。運命の日は密やかに訪れていた。

1・てんしょく

兎はメリーゴーランドに向かう熊を追って走った。

これでは誤解を招くかもしれない。

正確には、兎の着ぐるみと熊の着ぐるみだ。寂れた平日の遊園地、兎の着ぐるみを着た瑠香は、同じく熊の着ぐるみを着た日々輔を追って、メリーゴーランド前に向かった。

瑠香が着ている兎と、日々輔が着ている熊は、園内では恋人同士という設定になっている。常に二人一組の行動を要求された。「兎と熊がどうやって恋人同士になったのだ」と疑問を口に出すものは、今の所園内には居ない。明らかにどこかで見た事のあるデザインではあるが、「これは著作権上、大きな問題がある」と指摘するものも、今の所園内には居ない。

とにかく、瑠香と日々輔は、アルバイトの時間中、常に並んで過ごしていた。

そして今日も、メリーゴーランドの前で、色とりどりの風船を片手に二人は待った。何を？ 当然、子供達だ。

「瑠香坊、俺は凄い事に気付いたぞ」

「なんですか？」

「この遊園地は、まるで人気が無い。平日で、開園直後とは言え、こんなにガラガラなのは不味いだろ。経営難というやつだな」

「そんなの、前から知ってますって」

周囲を見る。笑ってしまっ程、誰も居なかった。一応、メリーゴーランド前に係員が居るが、カウントしない。掃除のおじさんが目の前を横切ったが、カウントしない。瑠香は溜息を吐く。大丈夫か？ この遊園地。

「もう一つ凄い事に気付いた」

「今度はなんですか？」

半ばうんざりしながら、一応尋ねる。

「全然客が居ないのに、張り切って熊や兎に成りきってる俺達は、馬鹿だ」

「しょうがないじゃないですか。これが、仕事なんですから」

「俺はな、最近、自分が人間なのか熊なのか、判らなくなってきたんだぞ。仕事のやり過ぎだ。職業病というやつだよ。それなのにむくわれない。人生ってなんだって感じた」

瑠香は聞き流しながら、周囲に目をやる。ジェットコースターと観覧車が動き出したが、果たして何人が乗っているのだろうか。

「この間なんて、ついつい川まで行ってしまったくらいだ。鮭を取りにな」

「本当に取った訳じゃないですよね？」

「取ったよ。一撃必中だ。お陰で晩御飯はごちそうだった」

「言っておきますけど、それって、犯罪ですよ」

「え、なんで？」

「密魚です」

「ミツ？ なんだそれ。あんまり難しい事を言わないでくれ」

瑠香は、いつ「仕事を辞めさせてもらいます」と支配人に切り出すべきかと悩んでいた。高校を卒業してから直ぐに、この遊園地で働き始めたのだが、賃金は安く、働き甲斐も無いこの職場にいつまでも居座るつもりなど、毛頭無い。兎を被ったまま一生を終える気など、さらさら無い。

「日々輔さん。五年もこの仕事やってるんですよ」

隣の熊、日々輔にそう声を掛ける。

「辛くないですか？」

返事は直ぐに返ってこなかった。着ぐるみの所為で、一体どの様

な表情をしているのか、皆目検討が付かない。ただ、正面を向いたまま、風船を持ってニヤニヤ笑っている熊は、不気味と言えば不気味だ。

「この仕事を辞めたいのか？」

少しして、逆に質問を返され、瑠香は内心で少し焦る。

「えっと、五年もやってる大先輩に話しを聞いてみたいと思いきまして」

「この仕事は俺の天職だよ」

日々輔は迷い無く、そう言った。先程まで、仕事に関する愚痴を散々吐いていたにも関わらず、だ。

「このまま熊になるのも、悪くない。冬は寝て過ごし、春になったら起きるんだ。良い人生だよな、それも」

「なんだか、凄い自堕落な感じですけど」

「人間はせこせこ、忙しいんだよな。熊ののんびりした感じは、すげー笑える」

「熊も別に、のんびりと冬眠してる訳じゃないと思いますよ」

むしろ、冬眠というのは、一種の賭けの様なものである、という話を聞いた事がある。そのまま目覚める事も出来ずに、永遠の眠りに付く事も珍しくないそうだ。瑠香はその旨を日々輔に伝えようと思っただが、その前に、

「移動だ」

と、日々輔がのしり歩き出す。瑠香もそれに続いた。

一時間毎に、場所を移動する事になっているのだ。メリーゴーランド前に一時間。ジェットコースター前に一時間。そしてカフェテラス前で一時間。風船を持ったまま、汗ダクになりながら待機する子供に蹴りを入れられる。子供に泣かれる。それを繰り返す。

ダイエットには丁度良いが、やりがいがあるかと聞かれれば、首を傾げる他無い。

1・てんしょく(後書き)

連載第三弾「兎ぐるむ熊ぐるむ」開幕です。

最近、一人称ばかりだったので、三人称の書き方を忘れてやしな
いかと不安になり、あえて三人称に挑戦してみました。

そして、トカゲ初の女性主人公。

色々不安な点はございますが、よろしければよろしくおねがいし
ます。

2・ふうせん

ジェットコースター前。瑠香と日々輔は待った。何を？ 当然、子供達だ。

「やっぱいねえ」

「いないですね」

「風船つて腐るのか？」

「腐らないと思います」

じゃあ大丈夫か。と、日々輔が妙な所で安心する。

「そもそも、ジェットコースター前つてのが間違ってるんだよな」

日々輔の饒舌さ、口の悪さは園内でも有名だが、それのお陰で退屈せずに済んでいるのも事実だ。

「何がですか？」

食いついてみる。

「だってさ、これからジェットコースターに乗る客が、風船を受け取るか？俺なら要らないね。飛んでくか、さもなきゃ割れるだろ」

「そんな事言つてたら、殆どのアトラクションがアウトじゃないですか」

「それもそうだな」

日々輔はあっさり認め。それからすぐに、「じゃあ」と前置きをして更に続ける。

「風船つて、どうなんだ？」

「またやぶから棒に」

やぶから棒に、の意味も良く知らないが、とにかく瑠香は兎の中で眉間にシワを寄せる。やぶから棒に、何を言っているのだこの男は、と。

「どうなんだよ。おかしいだろ。風船を持ったままアトラクションには乗れないじゃないか。俺達はどうして風船を配ってるんだ？俺達が配ってるのはなんなんだ？ おかしいよな。おかしいだろ」

「別におかしくないですよ」

瑠香は、半ば面倒になりながら、それでも「おかしくない」理由を探した。遂いつもの癖で、日々輔の言葉を否定してみたが、そこから先が思い浮かばない。ややあつて間をおいてから、やけくそ気味に、

「待っていてくれる人が居るんですよ」

と、答えた。答えてから、これは案外、的を射ているかもしれない、とさえ思った。

「待つ？」

「風船をもつて、待っていてくれる人が居るんです。子供がアトラクションを楽しんでいる間、パパやママは、風船を持って子供を待っています。つまり」

「つまり」

「風船は、目印です。『ここで待ってるよ』という決意表明になります」

言い終わった後、これは中々馬鹿らしいかもしれない、と気づいた。ただ、所詮馬鹿話なので、馬鹿らしいくらいでちょうどいいかもしれない、とも思った。

日々輔が熊の中でどの様な表情をしているかは判らないが、「パパやママねえ」と鼻で笑ったので、馬鹿にしているのだな、とは判った。よく見ると、常にニヤニヤと笑っている熊の気ぐるみも、人を小馬鹿にした様な顔だ。実際には、兎の着ぐるみも常にニヤニヤと、人を小馬鹿にした様な表情なのでお互い様なのだが、瑠香はムと声を上げ、誰にも見えない様に日々輔の足を蹴った。

「つあ」

日々輔が情けない悲鳴を上げた後で睨んでくる。が、熊の着ぐるみがニヤニヤ笑っているので、余り迫力が無い。

「あにすんだよてめえ」

周囲の眼が無い事を確認した後、小突いてくる。

瑠香も黙っていない。周囲の視線を確認して、反撃する。

兎ぐるむ熊ぐるむ

日々輔も決して黙らない。周囲の視線を……
水面下。二人の、兎と熊の戦いは続いた。

2・ふつせん(後書き)

前作に比べて、かなりのんびりとした話になりそうです。反動でしようか。

兎ぐるむ熊ぐるむ

3・にせひびすけ

カフェテラス前。二人は風船をもって持った。何を？ 当然子供達だ。

昼時という事も手伝って、カフェテラスは、満員御礼とは言わずともちらほらと席が埋まっている。家族連れが主だが、恋人同士と思われる若い二人組みも居る。いいなあ、と瑠香は思う。それからこっそりと日々輔を伺ったが、熊を被った日々輔は、先程の事を根に持っているのか、珍しく静かだ。

「ちよつと、先輩」

声を掛けても、すぐには反応しない。

「まーだ根に持つてるんですか。言つとくけど、先輩も殴ったんだから、お互い様ですからね」

「ん？」

のんびりと、日々輔が声を上げる。

「ごめん。聞いてなかった。ちよつと考え事してたんだ」

日々輔の口から、「ごめん」などという高尚な単語が飛び出すとは思っていなかった。瑠香は少なからず驚いた。思わず許してしまつたくらいだ。

「なにをですか？」

許す代わりに、聞く。この私が声を掛けたというのに、なにを考えていて聞こえなかったのだ、と。くだらない事だったら、もう一度こっそり蹴つてやる、とも思った。

「風船について」

諦観する様な、どこか遠くに向かって呟くかの様な口調だった。

一方で、瑠香は「まだ考えていたのか」と呆れる。

「風船というのは、『待っている』事の決意表明なのか？」

「なのか？ と言われても、正直困りますけど」

正直適当に言ったのですけど。

「案外、的を射てるかもしれないな」

などと、日々輔が若干的外れの事を言う。「風船をもっていたら、考えてやってもいいな」と意味不明の独り言も呟いていた。そして、遙か頂を見据える登山家の様に顔を上げ、空を見る。それきり、電池が切れた様に動かなくなつた。もしくは冬眠する熊の様に。

「どうしたんですか？」

不安を覚えて、聞く。「んー」と、切れの悪い返事が返ってきて、やはり様子がおかしい事に気付いた。

「今日の先輩は、なんだか変です」

いつも変だけど。と、溜香はこっそり思う。

「そうかな」

「もしかして、今日は、別の人が入ってるんですか？」

「熊の中に？」

「いや、日々輔さんの中に」

言うと、日々輔が、ぶ、と噴出した。「俺の中にか」と。

「熊の中に入っている先輩の中に、更に別の人が入っているのです。偽日々輔ですね」

「別の人って誰だよ」

考えあぐねて、「小さい日々輔とか」と意味の判らない事を言うてしまった。

「結局俺じゃねえか」

と、日々輔は屈託無く笑う。この屈託無く笑う、少年の様な先輩が、溜香は嫌いではなかった。いや、むしろ好きだ。今の所はまだ言えないのだけれど。

兎ぐるむ熊ぐるむ

3・にせひびすけ(後書き)

IMEが、「熊」という単語を出力しません。
よって今作の「熊」という単語は、全てコピー&ペーストでお送り致します。

4・まいごのじ

迷子の子供を見つけたのは、午前の仕事を終え、休憩の為に楽屋に向かっている時だった。

白いワンピースを着た、目の大きな女の子だ。周囲に、大人の姿は見えない。直感でしかないが、迷子かもしれない。瑠香がそう思った直後、女の子が顔を上げて、こちらに近づいてきた。

「げ」
日々輔があからさまに嫌そうな声を上げた。瑠香も思わず、「う」と声を上げてしまう。

「私、迷子なんだけど」

言っている割には落ち着いた様子だった。家族と逸れたパニックから泣き出す事も、うるたえる様子も無い。どちらかと言うと、冒険を楽しむ少年の様に悪戯っぽい笑顔が顔に張り付いている。「おじさん達。迷子のセンターまで案内してくれない？」

「おじさんじゃない。熊だ」

「だって、中におじさんが入ってるんでしょ？」

「入ってねえよ」

「私、知ってるもん」

「ガキが何を知ってるってんだ」

「だって、サンタもパパじゃん」

「サンタがパパな訳じゃない。パパがサンタなんだ。それと同じだ。俺が熊なんだ。熊のプロだっつーの」

日々輔は、子供との口喧嘩ですら一歩も引こうとしない。意味不明な屁理屈にしか聞こえないのだが、妙な説得力があった。

「熊のプロってなんだよー」

不満げに頬を膨らます女の子は、可愛らしかった。

「川に鮭を取りに行った事だっただけあるんだ」

それを聞いた途端、女の子の眼が輝いた。「すごい」と感嘆し

ている。ひねているのか、純粹なのか。判断が付かない。ついでに言えば、何が凄いのかも判らないのだが、日々輔の方が子供の扱いに慣れているので、口出しはしなかった。

「じゃあさ、じゃあさ」

女の子は唐突に興奮し始め、飛び跳ねた。「やっぱり、ハチミツが好きなの？」

「好きだよ、好き好き。超好き。一日三食ハチミツだから」

日々輔は意外に子供に優しい。

女の子を後ろに連れて、センターに向かう。センターで子供が泣き始めた時や暴れ始めた時、楽屋で休んでいる「中の人」を直ぐに呼び出せる様に、という配慮から、センターと楽屋テントは密接しているのです、どの道、当初の目的地とは変わらなかった。

「先輩って意外と子供に優しいですね。やっぱり子供が好きだから、この仕事をしてるんですか？」

「はあ？」

日々輔が、眉間にシワを寄せるのが眼に見える様だ。それから、一瞬だけ後ろを振り返って、先、迷子の子供がこちらの会話を聞いていることを確かめると、

「まあ、確かに、嫌いじゃないけど。苦手だ。疲れるんだよ、子供の相手は」

と、言った。

「そうなんですか？」

「俺がたまに家に帰ると、弟やら妹やらが騒がしくてな。家でも、仕事先でも子供の相手をしてるんだぜ？ うんざりだ」

「あら、意外です」

「何が」

「先輩、お兄さんだったんですか」

「その何が意外なんだよ」

「いえ、なんか、一人っ子っぽかったので」

かく言う私は一人っ子なのだが、と瑠香はこっさり思う。

「ウチは大家族だ。今度、遊びに来いよ。多分、瑠香坊なら直ぐに大人気だ」

「そんな事言つて、若い女の子を家に呼び込もうという魂胆ですか」
そして、親に紹介しようという魂胆ですか。それならそれで、実は構わないのだが。

「兎を着て来てくれないか？」

程無く、日々輔はそう言った。意味が判らず、聞き返す。

「兎？」

「その兎。今、瑠香坊が着てる兎だよ。あいつ等、こつこつこの喜ぶんだ」

家族の事を話す日々輔を見るのは初めてだったので、新鮮だった。暖かな陽だまりの事を話すかの様に、優しい口調だ。これも、意外な一面だ。

「家族思いですねー」

「家族を思わない奴なんて、屑だよ」

日々輔はそう言い切った。その言葉が、グサリと瑠香に刺さる。

そういえば、上京してから一年、ロクに親とも連絡を取っていない。

今日、仕事が終わったら、連絡の一つでも取ってみようか。と、なんとなしに思った。

兎ぐるむ熊ぐるむ

4・まいごのこ(後書き)

一人称の三人称。

ごめんなさい。言い訳かも知れません。

5・ぐるみ

「ぐるみ、というのがあろう」

ぐるみ、など聞いた事も無い。「無いですよ」瑠香は汗の雫が流れる顔をタオルで拭いた。濡れた髪が頬に付くのが鬱陶しくて、後ろに払う。それから兎の頭に手を伸ばした。

休憩時間。冷え切ったコンビ二弁当を食い終えた日々輔は、休憩時間が残っているのにも関わらず、一秒でも早く顔を隠したい、とでも言う様に、直ぐに熊の頭を被っていた。真似る様に、瑠香も直ぐに兎の頭を被る。

「あるんだ」

日々輔は、譲らなかつた。「ぐるみだぞ、聞いた事があるだろう」と、しつこく詰め寄る。そこまで言われると、あるのかも知れない、と思い、渋々と

「ぐるみ、ってなんですか？」

と、瑠香は聞いた。

「本当に知らないのか」

「っていつか、言っている意味が判りません」

「ぬいぐるみ、の『ぐるみ』の事だ。着ぐるみ、の『ぐるみ』でも良い」

「はあ」

また訳の判らない話が始まるぞ、と瑠香は覚悟した。日々輔は、演説をするかの様に両手を広げている。訳の判らない話をしますよ、主張している様にも見えた。

「ようするにだ。ぬいぐるみ、というのは『縫った』『ぐるみ』の事だと思っただ。そうだろう？ 着ぐるみ、というのも言葉のままだよ、正に『着る』『ぐるみ』の事だ」

「え、そうなんですか」

妙な説得力に、瑠香は身を乗り出す。

「じゃあ、ぐるみって結局なんですか？」

「それを一緒に考えないか？」

「……嫌です」

ぐるみ、など考えたくも無い。

「いやあ、すっかり秋らしく、涼しくなったよね」

支配人は、楽屋テントに乱入したと同時に、そう言い放った。言い放ってから、交互に熊と兎に入っている日々輔と瑠香を見る。支配人じゃなければ、着ぐるみの中がどれだけ暑いのか今すぐにも身体に教え込んでやりたい所だった。

「珍しいスね。仕事は良いんですか？」

日々輔も同じ事を思っているのか、言葉の端に若干の棘があった。が、オーナーは全く怯まない。「お客様が少ないから、僕の仕事も少ないんだ。だから、心配しなくても良いよ」と、逆に心配に成る様な発言を飄々と言い放つ。

「いやあ、しかし、涼しい。涼しいね。夏の終わりだ。寂しい様な気もするね」

「オーナー」

耐え切れなくなつて、瑠香は口を開く。

「もしかして、嫌味を言いに来たんですか？」

着ぐるみの中が、どれだけ暑いのか教えて欲しいのですか？

「そこに、ねずみが余ってるけど、オーナーもどうですか？」

瑠香は、楽屋の隅でぐつたりと横たわるねずみを指差した。

「あ、いやいや。ごめんごめん。そうじゃなくてさ。今ね、センターの女の子が、『熊を呼んでこい』って騒いでるから、ちょっと、出勤してくれないかなーなんてさ」

「ああ」

と、日々輔が首肯する。「さっきの子か」

「まだ、親御さんは到着してないんです？」

先の迷子の家族に向けた園内放送が二十分程前に流れていた筈だが。

「まだ来てないねー」

支配人は、のんびりとしたものだった。「とにかく、お願いしていいかな」

「いいツスよ」

日々輔は、意外にも文句一つ言わず立ち上がった。瑠香は、呼ばれているのは熊だけなのだから、と立ち上がらなかった。が、直ぐに支配人が「兎も勿論一緒にね」と、笑顔で言う。

「え」

「だって、君達は、二人で一人だから。恋人同士だから」

「前から思ってたんですけど、その設定ってどうなんですか？」

熊と兎で、どうやって恋人同士になったのだ？ と瑠香は思う。

思いながらも、渋々立ち上がる。逆らっても無駄だし、休憩時間だからと言って、やる事は無い。

去り際に、支配人が、重大な何かを今思い出した、と言わんばかりに「あ」とわざとらしい声を上げた。「そうそう」と続ける。その余りのわざとらしさに、ここに来た本当の用件は、むしろこちらだな、と直ぐに判った。

「日々輔君。その、なんというか」

ぎこちなく、言い辛そうにまごつく。喋り方を忘れたかの様に、

「その、その」と繰り返す。

「なんですか？」

「嫌ね、ほら、えっと」

「なんですか？」

支配人の不審な態度の所為か、楽屋に妙な緊張感が漂った。やがて支配人が意を決したかの様に、

「君の親御さんが来てるよ」

と、そう言った。普段からニコニコと、怪しい笑みを浮かべている支配人にしては珍しく、真剣な表情だ。

日々輔は何も言わなかった。

「……どうする？ なんなら、今日はもう上がっても良いし」

え？ 瑠香は会話の流れに付いていけず、首を傾げる。溜まらず、口を出した。

「親御さんって、先輩の親御さん？」

「ん？ ああ、そうそう。日々輔君の、お父さんお母さん」

「それがどうかしたんですか？」

ゾ、と血の気が下がる程、冷たい声が聞こえた。一瞬、誰の声か判らない程だったが、程無く、日々輔が続ける。

「俺には関係ありませんから」

「いいのかい？」

「放っておけばいいんです。会う気はありません。瑠香坊、さっさと行こうぜ」

「え、あ、ちよ、ちよつと、先輩」

日々輔がさっさと歩き始め、瑠香がそれに続く。追いついて、横に並ぶ。

「さっきは、どこかの熊さんが、『家族を思わない奴なんて屑だ』なんて言っていましたけど」

「なんだよ」

「別に仕事を上げれとは言いませんけど、休憩時間を利用して会うくらい出来るんじゃないですか？」

日々輔は返事をしなかった。不機嫌そうに、のしのし歩く。

「お父さんとお母さん、どこから来たんですか？」

日々輔が、都内のおんぼろアパートで一人暮らしをしているという話は聞いた事があるので、きつと、その両親はどこか遠くで日々輔の事を思っているのだな、と瑠香は思った。ただ、日々輔はすげないもので、

「知らない」

と、ただ一言一蹴するだけだった。知らない訳が無いのだから、

兎ぐるむ熊ぐるむ

話したくないのだな、信用されてないのだな、と少し寂しい気分になる。

兎ぐるむ熊ぐるむ

5・ぐるみ（後書き）

着るぐるみの中は、冬でも汗を掻ける程暑いのです。

6・けつひひょーめい

センターに着くと、先に出会った迷子の少女が仁王立ちしていた。「熊！」と叫ぶ。「遊べ！」

「元気のいい小娘だ」

日々輔は、言うが早い飛び掛り、センターの中で鬼ごっこが始まった。きゃあきゃあと、楽しそうに少女がはしゃぐ。きつと、熊の中の日々輔は汗だくだろう。

「なんだか、ごめんね」

センターで、園内放送を担当している小西こにしが瑠香に向かって頭を下げた。

「いえいえ。だけど、この分だと私の出番は無さそうすな」

センターで走り回る日々輔と少女を見る。日々輔が少女を捕らえたかと思うと、どこから手に入れたのか、少女が玩具の剣を振り回し、何度も日々輔を斬りつけた。「やめるクマー」と、取って付けた様な語尾を付けながら日々輔が倒れた。少女の追撃は止まない。

「きゃあきゃあ」と笑いながら、何度も日々輔を叩く。

「日々輔君は、本当に子供にもてるよねえ。何か秘訣とかあるのかな」

「多分、精神年齢が子供と近いんじゃないかと」

二十歳を超えた男が、『ぐるみ』について真剣に考えるとは思えないので、そう言った。その後で、支配人が、ぬ、と後ろから姿を現す。

「おー、やってるねえ」

「オーナー。暇なんですか」

「うん、まあね」

即答されて、何も言えなくなる。ああ、そうですか。と呆れるより早く、感心してしまいそうになった。

「ママ、来ないね」

不意に少女が、寂しそうにそう漏らした。先程まで、楽しそうに騒いでいたのだが、何がキツカケになったのか、唐突に、「捨てられちゃったのかな」と不安そうに呟いた。

「そんな訳ねえだろ」

「だって、ママ、来ない」

少女がセンターに着いてから、三十分は経っているだろうか。親の姿はまだ見えない。

「風船をもつてないからだ」

日々輔はそんな事を言った。風船？ と、その場に居た誰もが首を傾げた。

「風船は、『待っている』事の決意表明だ。そうだろ？」

決意表明、なんて言葉を子供が知っている訳も無く、少女はきよんとんとしていた。真似る様に、「けついひょーめい」と微妙なトーンで呟いた。

「風船をもつてれば、誰の目から見ても、誰かを待ってるんだな」と判る。風船はその為にあるんだ

「本当？」

と、少女が首を傾げる。嘘だよ、と瑠香は心の内でこっそり答えた。それから、風船を取りに楽屋に戻ろうと背を向ける。今、あの少女に必要なものは風船だ。

「熊も、誰かを待ってたの？」

少女がそう言うのが聞こえた。「え？」日々輔が間抜けな声を上げる。

「だって、さっきお外で会った時は、風船を沢山もってた」

日々輔がなんと答えるのか、興味があつて、瑠香は立ち止まる。

「俺」

珍しく、言葉に詰まっている。まるで天井に回答があるかの様に、首を上げて、「俺は」と、何度も呟く。

結局、答えは出なかった。

それから、十分は経っただろうか。その十分の内に、日々輔は少女にプロポーズされ、安易にそれを了承し、「だけど君が大きくなる頃には、冬眠してるかもしれない」と適当に誤魔化したりもしていた。それはともかく、十分後、少女の母親が涙ながらにセンターを訪ねた。

瑠香は、まず母親の若さに驚いた。顔には幼さが残っていて、茶色い髪も若さを強調していた。二十台前半といった所だろうか。

母親の顔を見て、緊張の糸が切れたのか。少女が大声で泣き出した。耳を塞ぎたく成る程の声だったが、着ぐるみの中なのでそれも出来ない。

「ありがとうございます、ありがとうございます」

母親は、何度も頭を下げた。「もう会えないかと思った」と、少々大げさな台詞も口にした。「もう会えない」という言葉に反応したのか、少女の泣き声は更に大きくなった。

日々輔はその光景を黙って見ている。

6・けついひよーめい(後書き)

小西(姉)。園内放送と迷子センター担当のお姉さん。

小西(弟)。「犬だつて取引はする」の秋色青年の友人。

それはともかく、子供を書く事の難しさを思い知りました。

7・まわりめぐる

メリーゴーランドと楽屋テントはそう離れていない。目視出来る程の距離だ。

「さつき、プロポーズされましたよね」

休憩時間が終わり、再びメリーゴーランド前で風船を配りに向かう道すがら、瑠香はからかうつもりでそう言った。対し、日々輔は照れる様子も無く、むしろ胸を張って、「まあな」と答えた。

「もてるんだよ、俺は」

「主に子供に、ですか」

「これで俺の婚約者は六人になった」

「え」

「チエミちゃんに、ユミちゃんに、ルーシーちゃんに、タケシ君に、ハトリちゃんに、それにさっきの子、ナナカちゃん」

「一人男の子が混じってませんでしたか？」

タケシ君。

「全員、十歳以下だ」

「プレイボーイですね」

日々輔は笑う。「五年も経てば、皆俺の事は忘れるさ」

「いや、案外覚えてるかもしれせんよ。十年も経った後、先輩の前に現れて、『さあ結婚しましょう』とか言い出す子が居るかも」

「十年後にも熊は居るかな」

唐突に、日々輔が話を逸らす。無意識なのか、わざとだったのか、その判断は付かない。

「熊？」

「熊の絶滅は、そう遠くない。果たして十年も持つかな」

「さっきの話と、今の話って、何か関係してますか？」

「この世に、関係を持たない話なんて一つも無いよ」

午前の時と違い、メリーゴーランド前にはちらほらと人の影が見えた。千客万来とは言えないが、午前の、閑散とした空気よりは遙かにマシだ。回転するメリーゴーランドに乗ってはしゃぐ子供達に、それを待つ親の姿。メリーゴーランドの回転に合わせ、気の抜ける音楽が流れている。

子供達は、初め着ぐるみに怯え、親の影に隠れるが、やがておずおずと手を差し伸べ、風船を受け取る。風船を受け取った瞬間、子供達の顔に、花が開く様に笑顔が広がった。

空を見上げる。青い風船が、そのまま空の青さに溶け込んでいた。誰かが手放したのだらう。必要無くなったのか、それとも過失なのか、それは判らないが、空に解き放たれる風船は、二度と帰る事のない旅に出る冒険者の様な力強さがあつた。瑠香はその冒険者が嫌いではない。ただ、一人の姿はどうにも寂しそうに見える時がある。

日々輔も、その風船を、冒険者を目で追っていた。

不意に、日々輔の右腕がピク、と動いた。手を伸ばしそうになつたのだ、と直ぐに判る。長く風船を眺めていると、追いつける様な追いつけない様なもどかしさを覚えて、時折手を伸ばしたくなる。その気持ちは瑠香にも判つた。もしかすると、誰にだって判るかもしれない。

メリーゴーランドが止まれば、笑顔の子供達が親と手を繋ぎ、去っていく。そしてまた別の子供達がメリーゴーランドに乗る。それが繰り返された。

メリーゴーランドに背を向けるかの様に設置された白いベンチがある。そこに、中年の夫婦がずっと座っている。メリーゴーランドが回り、回り終わり、人が巡っても、その夫婦だけは時間が止まつたかの様に動かない。

会話をしている様子も無く、ただ押し黙って、それこそ岩の様に動かない。

暗い顔つきの夫婦だった。失礼を承知で言えば、萎れた花の様な印象を受けて、これも失礼を承知で言えば、不憫な気持ちになる。夫婦の間に流れる暗い空気が、重さを持ち、夫婦を押し潰しているかの様に見えた。背筋が曲がっていて、実際の年齢などは判らないが、年老いて見える。

「なあ」

と、日々輔に小声で声を掛けられる。

「瑠香坊、あの二人、あの夫婦。どう見える？」

漠然とした質問に、瑠香は首を傾げる。

「どうつて？」

「なんでも良いんだ。あの二人を見て、感じた事を聞きたいんだ」

そんな事を言われても、と思いつつも、瑠香は答える。

「なんだか、疲れてるって感じですよ」

「そう見えるか？」

「まあ、見えなくてもない、といった所です」

「俺には誰かを待っている様に見えるんだ」

日々輔の断定口調に、「言われてみれば」と瑠香は思う。ただ、確信が持てた訳でもないし、そもそも興味が無かった。「言われてみれば、そうかもしれませんね」と、適当な相槌を打つ。

「風船を渡して来いよ」

果たして、日々輔がそう言った。

「え？」

「風船を渡すんだ。誰かを待つなら、風船が必要だ」

「まだそれにこだわってましたか」

そもそも、自分で行けばいいじゃないですか。とも思った。

「あれじゃあ、待っているのか、それともアリの行列を眺めているだけなのか判らない。判りやすい目印が必要だろ」

「それが、風船ですか」

「風船が、『ここで待ってるよ』という決意表明になると言ったのは瑠香坊じゃないか」

「本当に誰かを待ってるんですかね。ただの日向ぼつこという可能性もあります」

「それも確認してくれないか？」

日々輔が、ヤケに熱心に言う。「頼むよ」と頭を下げた。

「誰かを待っているんですか？」と聞くんだ。「待っている」と答えたら、風船を渡す。それ以外だったら、得意の蹴りの一つでも入れてやれ」

「これは何かのゲームですか？」

奇妙な頼み事に困惑しつつも、日々輔の熱の入りに断わり難いものを感じ、渋々ながら溜香は、白いベンチで項垂れる中年夫婦の元に向かう。

7・まわりめぐる(後書き)

欺くて十年後。世界は大きく変化していますが、それはまた別の
お話。

8・ひとでなし

「子供を待ってるらしいですよ」

瑠香はそう報告する。先の中年夫婦は、初めはマスコットに話しかけられた事に戸惑い、若干の警戒を見せながらも、「子供を待っているんです」と答えた。「私達の、子供を」掠れ、消え入りそうな程、弱い声だった。

瑠香は半ば無理矢理、中年夫婦に風船を渡し、日々輔の元に戻った。

「ふうん」

先程の熱の入り用はどこへやら、日々輔は興味も無さそうに相槌を打った。「いや、ごくろう」と、偉そうに言う。

「何か、気になる事でもあるんですか？」

「別に」

言いながら、日々輔は風船を持った中年夫婦を見ている。中年夫婦も、胡散臭いものでも見るかの様な眼で、こちらを見ている。

「そろそろ時間だ。行こうぜ瑠香坊」

視線から逃げるかの様に、日々輔がさっさとその場を立ち去ろうとしたので、瑠香は慌ててそれを追った。

最後に、振り返る。

頂垂れた中年夫婦の力無い手に、赤い風船がふよふよと浮いている。嘲笑っている様にも見えるし、慰めている様にも見えるし、とどのつまり、ただの風船の様にも見えた。

ジェットコースター前、二人は待った。何を？ 当然、子供達だ。断じて、赤い髪の毛のろくでなし、人でなしを待っていた訳ではない。ジェットコースター前に着いた矢先だった。つい先程まで、張り切って走り回っていたジェットコースターが帰ってきて、乗っていた

客を吐き出していた。その吐き出された客の中に、赤い髪の男は居た。

細身で、背は低く、平日の遊園地に居るよりは、ゲームセンターでたむろをしている方が似合っていていそうな、柄の悪い雰囲気の方だった。赤い髪が目立っていて、周囲の客の視線も集まっていた。

「あ」

と、声を上げたのは日々輔だ。

「なんでアイツがこんな所に……」

呆れた様な口調だった。

「知り合いですか？」

鼻屑目に見ても、まっとうな人間には見えず、「なんだか、柄の悪い人ですね」と口走る。「ヤクザみたい」

「格好だけだよ、アイツは」

親しい仲なのか、言葉の割には親しみのこもった口調だった。その内、その赤い髪の男もこちらに気付き、歩み寄ってきた。

「こんな所で何してるんだよ、朱花^{あか}」

最初に声を掛けたのは、日々輔だった。対し、朱花と呼ばれた男は飄々と肩を竦め、

「噂に名高いジェットコースターというものを試してみたんだが、あんなに回転して本当に大丈夫なものなのか？」

朱花と呼ばれた男は、額にうっすらと汗を掻いていた。顔色も、心なしが青い。「俺の時だけ、余分に回した訳じゃないだろうな」よく見ると、膝も笑っている。ようするに、怖かったらしい。

「いや、怖かった訳じゃないんだ」

まるでこちらの心を読んだか様に、朱花が言う。「ちょっと酔っただけだ」

それから、一問置き、

「君が溜香ちゃんか。ふうん、変な格好だな」

と、失礼極まりない台詞を吐く。

「先輩、なんなんですか。この赤いの」

失礼に対しては、失礼を返すのが瑠香の流儀だった。

「まあ、ちよつとした知り合いだ」

ちよつとした知り合い。ほど不親切な紹介もあるまい、と瑠香は思う。そもそも紹介になっっていない。が、結局の所、瑠香はそれほど朱花に興味を持たなかった。それ以上は聞く気も無かった。

「一人か？」

日々輔が朱花に聞く。

「いや、賀古かこさんに頼まれてここまで送って来たんだ」

「母さんに？」

日々輔が、掴み掛るかの様な勢いでそう言った。「母さんも来るのか？」

おや？ と瑠香は思う。会話の流れに違和感を覚えた。が、違和感の正体に瑠香が気づかぬまま、会話は続く。

「楽屋テントに居るから、後で顔を出してやれよ。俺は、折角だから遊園地を満喫させてもらっよ」

「一人でですか、寂しいですね」

嫌味のつもりで、瑠香は言う。

「この間はデイズニールランドまで行ったんだけど、結局何も出来なくてな。雪辱戦だ」

この朱花という男は、嫌味を通じるタイプの男ではないらしい。

飄々と、受け流す。「後で俺も楽屋に顔を出すよ」

言いながら、こちらに背を向けて立ち去ろうとするが、それを日々輔が止めた。

「おい」

「なんだ？」

「今回の件、お前も噛んでるのか？」

今回の件、が一体何を指すのか、瑠香は判らない。首を傾げるばかりだ。

「俺は疑われやすいらしい」

と、朱花が苦笑する。

「俺は賀古さんに、『ここまで送ってほしい』と頼まれただけだよ。あの、免許も持ってないし、ここは遠いからな」

「お前も無免じゃねえか」

「免許を取る実力は持つてるよ。俺には機会が与えられないだけだ」
肩を揺らし、去ろうとしたが、その前に、

「お前、どうするつもりなんだ？」

と、尋ねて来た。

「どうするってなんだよ」

肩を竦め、朱花が今度こそ去っていった。

朱花が去った直後、無形の違和感が溜香を襲った。ハッキリと、
ここが、とは指摘出来ないが、何かがおかしい。この遊園地で何か
が起こっている。そんな予感がした。

それから、ジッと日々輔を見る。おかしいと言えば、日々輔の様
子もどことなくおかしい。普段から妙な先輩ではあるが、どこかと
聞かれれば答える事も出来ないが、とにかく、妙だ。

普段見慣れている、閑散とした遊園地に、無形の違和感が染み込
んで来ている。いつもと違う、何かが違う。ただ、何が？

兔ぐるむ熊ぐるむ

8・ひとでなし(後書き)

なぜか、「遊園地に人を送り届ける」役割が多い朱花。

「今日って、何かあるんですか？」

「耐え切れなくなつて、瑠香はそう聞いた。違和感はますます膨れ上がり、暗澹とした、形の無い、『もやもやとしたもの』としか形容しようの無い何かが辺りに充満している。」

「何かつて？」

「いや、なんか、変なんですよ」

「何が？」

「何が？ と聞かれれば答えられないけど、何かこう、もやもやとつか、むらむらとつか、変な気分です。今日は何か、特別な日な気がします」

「風邪でもひいたんじゃないか？」

「日々輔は、さして興味がある様には見えない。」

違和感の正体の内の一つに気が付くには、然して時間は掛からなかった。カフェテラス前、風船をもつてポーッと待機している内に、不意に閃いたのだ。

「そういえば、支配人も、先輩の親御さんの話をしましたよね」

「していたような、していなかったような」

「日々輔は歯切れの悪い答えを返す。」

「で、さっきの赤いのも、先輩の親御さんの話をしましたね」

「していたような、していなかったような」

「しました」

「瑠香は言い切り、」

「あの時、先輩、あの赤いのに言われた時、改めて驚いてましたよね。支配人に言われた時は、余り驚いてなかったのに」

「驚いたような、驚かなかつたような」

「驚いてました」

瑠香は、謎を解き明かす探偵の様な気分だった。この、正体不明のもやもやを吹き飛ばす為には、謎を解き明かす他無い。

「どうしてですか？」

危うく、あなたが犯人ですね？ と聞く所だった。

「そんな事よりも、俺はまた一つ、新しい言葉を生みだしたぞ」

日々輔は、その話題をあからさまに避けたがっていた。追求しては駄目なのか、と、肩を落とす。

「ぐるみ、というのがあろうだろう」

「いや、その話はさっき聞きました。ぬいぐるみの、『ぐるみ』でしよう」

「あの話には続きがあるんだ」

「二作目は駄作が多いですよ」

「ターミネーターは二作目がヒットしたじゃないか」

有名な話を請け合いに出して、日々輔は強引に話を進めた。

「ぐるみ、というのは、先に話した通り、ぬいぐるみの『ぐるみ』だとか、着ぐるみの『ぐるみ』の事なんだ」

「家族ぐるみ、だとか、会社ぐるみ、という言葉もありますね」

「言つと、日々輔は「それは忘れる」とやはり強引にねじ伏せる。それでだ、俺達は着る『ぐるみ』を着ている訳だ。瑠香坊は兎を着て、俺は熊を着て、毎日毎日、汗だくになりながら、馬鹿みたい」

話しながら、日々輔は叙々に興奮している様だった。やはり日々輔は、馬鹿な話をしている時が一番輝いている。

「この、俺達の行為を、『ぐるむ』と名づけるのはどうだろう」

新種を発見した生物学者が、新種の生物に名前を付けるかの様な興奮を見せながら、日々輔はそう言った。

「ぐるむ」

呟いてみる。

「瑠香坊は兎ぐるむをしている。俺は熊ぐるむをしている」
どうだ、と言わんばかりの態度だった。

兎ぐるむ熊ぐるむ

「小話としては、三十点」

「ハードルが高いな」

そんな話をしている内に、カフェテラス前の一時間が過ぎた。

兎ぐるむ熊ぐるむ

9・ぐるむ(後書き)

話は後半戦へ。

二度目の休憩を取る為に、楽屋テントに戻ろうと歩いている途中。メリーゴーランドから気の抜ける音楽が流れてきて、釣られる様にメリーゴーランドに目を向けた。

最初に目に入ったのは、二時間前と変わらぬ位置を泳いでいる赤い風船だった。音楽に合わせて、ゆらゆら揺れている。

その下には、相変わらずの暗い表情で俯いている中年の夫婦が居る。二時間もの間、あの二人は何をしているのだろうか。

二時間前よりも更に疲弊していて、今にも泣き出しそうな表情が見えた。それでも、グッと歯を食いしばり、試練に耐えるかの様に拳を握っているのも見えた。

辺りを流れる陽気な音楽は、気の利いた皮肉にも聞こえたし、中年の夫婦を慰めている様にも聞こえたし、とどのつまり、ただの音楽にも聞こえる。

楽屋テントに戻ると、そこには大勢の人が居た。楽屋テントは普段、日々輔と二人で独占状態なので、不法に占拠されたというか、住居に侵入されたというか、とにかく縄張りを荒らされた気分になる。

「これはなんの集まりですか？」

瑠香は、思わず口に出す。

「ていうか、その赤くて煙草臭いのは、なんでここに居るんですか？」

「全遊具を制覇したから、やる事が無くなったんだ」

「ははは」

普段は滅多に顔を出さない支配人と、先の赤い髪の男、朱花が向かい合って座りながら、煙草を吸っている。顔見知りなのだろうか。

「関係者以外立ち入り禁止なんですけど」

「どんなものにも例外はある」

ああ言えば、こう言う。

「ごめんなさいね」

と、壁際から声が聞こえたのは、今まさに、足を踏み出し、朱花を蹴り飛ばそうとした直前だった。

見慣れない老女が暖かな笑みを浮かべて、壁際の椅子に座っていた。誰だろう。瑠香がそう思った矢先、老女が口を開いた。

「朱花さんには、私が無理を言ったんです」

老女がそう言った瞬間。陽だまりに咲いた花から花粉が飛ぶかのように、色気がふわ、と飛んだ。老女と色気が無縁のものだと決めつけていたので、たじろぐ。

「始めまして、瑠香さん。それに、久しぶり、日々輔」

「母さん……」

日々輔がそう言った。

「へ？」

日々輔は、壁際に背を預けて座る老女、賀古の前で膝を付いた。熊の頭を外し、脇に置き、老女の手を取る。絵画でよく見かける、騎士と、王の構図だ。騎士が熊で、王が老女、熊の頭が兜。神聖な雰囲気すらあった。

改めて賀古の姿を見る。髪は白く、顔にはヒビの様なシワが何本も走っていて、瞳の周りだけが水々しく、そこだけアンバランスに若く、綺麗だった。身体が小刻みに震えていて、触れば折れてしまいそうな程痩せている。日々輔の母親、というよりは、おばあちゃん、と説明された方が余程納得が行った。

「体は、その、大丈夫なのか？」

日々輔はうやうやしく、老女、賀古を見上げる。老女の手が日々輔の顔を撫でた。そこでようやく瑠香は、賀古の瞳が光を反射していない事に気付く。

「少し痩せましたね。日々輔」

息が掛かった先から、花が開くのではないかと、そんな気分させられる程、暖かな声色だった。顔を撫でられながら、日々輔は照れくさそうに頭を掻いていた。

「瑠香さん」

突然声を掛けられ、瑠香は驚く。「あ、はい」と上擦った声で答えた。

「良ければ、顔を見せてください。私は眼が見えないので、こちらに来て下さればとても嬉しいです」

言いながら、賀古は誘うかの様に両手を広げた。

断る理由も無く、瑠香は兎の頭を脇に、置き、汗で顔にへばりついている髪を後ろに払った。それから、賀古に一步一步近づき、日々輔と同じ態勢で座る。

それと同時に、日々輔が「俺は冷たいものでも買ってくるよ」と、熊の着ぐるみを脱ぎ、そのままの勢いで外に駆け出した。呼び止める間もない、あっという間の退場だった。

「あ、先輩」

遅れて、声を出す。その頃には影も形も無い。

「日々輔は相変わらず落ち着きがありませんね」

賀古はそれが愉快な様でもあった。それから、手が顔に伸びてきた。顔を撫でられ、掌の体温とくすぐったさに、顔が綻ぶ。

「とても、綺麗な顔」

褒められる事に慣れていなかったもので、やはり照れくさくなり、頭を掻く。日々輔と同じ仕草だ。

「改めて始めまして。日々輔の母の、賀古と言います」

「は、はじめまして」

言ってから、伝えるべき肩書きを探したが、特に思い当たる節も無く、「兎の瑠香です」と奇妙な挨拶をしてしまった。

「うたぎ」

にこやかに、賀古が笑う。「日々輔は、くまですな」

うさぎ、くま。と、発音を楽しむかの様に呟く。それから、

「日々輔から話は聞いていますか？」

「話？」

「今日これから起きる事、それから、日々輔自身の話です」

「いえ……」

聞いていません。と正直に答えた。「先輩は、余り自分の話しをしてくれないですよ」「ぐるみ、やら、ぐるむ、やらの、意味不明な話は良く聞かされるのだが、日々輔自身の話は余り聞かない。

「そうですね。だけど、日々輔からは、瑠香さんの話を良く聞きますよ」

「え？」

「貴女をとて信用しています」

不意を突かれた気分になり、言葉に詰まる。自分の顔が熱を持った事に気付いて、慌てて話を変えようと、言葉を紡ぐ。

「あ、弟さんや妹さんが居るといふ話は聞きました。大家族らしいですね」

「家族。そうですね、沢山の子供達が居ます」

賀古は、やはり笑顔を見せる。が、今度の笑顔は、どこか寂しげな、力無い笑みだった。

「……あ」

思わず、声が出た。賀古の寂しげな笑みが呼び水となって、唐突に、『答え』が頭を横切ったのだ。まさか、と思いながらも、形も無くもやの様だった答えが、叙々に固形になっていく。

「多分、日々輔が自分で話してくれますよ」

こちらの様子を感じ取ったのか、賀古がそんな事を言う。多分、と言う割には断定口調だった。

「それは、私を知るべき話なんでしょうか」

「あの子の事を知ってあげてください。そして、あの子を助けてあげてください」

お願いします。と賀古は頭を下げた。

兎ぐるむ熊ぐるむ

漠然と現れた答えは、風船の形をしている。

兎ぐるむ熊ぐるむ

10・こたえ（後書き）

朱花は一人でカラオケボックスに入る事も出来る猛者です。

11・11らんど

まだ居るだろうか、と期待と不安がない混ぜに成った複雑な胸中で、瑠香は楽屋テントの中からメリーゴーランドを盗み見た。やはり、と言つべきだろうか。例の中年夫婦が相変わらぬ暗い表情で、メリーゴーランド前のベンチに座っている。

「気になるか？」

と、横から声を掛けられる。朱花だ。

「ええ、まあ」

返事をしながら、今度は日々輔に目をやる。いまだかつて見た事も無い、少年の様な表情で賀古とお喋りを続けている。それからもう一度、メリーゴーランド前の夫婦に目を向ける。対照的な雰囲気が残酷だった。

「どこにでもある話した」

朱花が言う。「本当に残酷な事は、他にも無数にある」

「朱花さんも、賀古さんの子供なんですか？」

「俺は違う」

間を置かず、朱花は続ける。「俺はもつと別の所から来たんだ」

別の所？ と聞いたが、無視された。逆に尋ねてくる。

「君ならどうする？」

「え？」

「もし、君が、日々輔と同じ立場だったとして」

考える。と無言の圧力を加えてくる。

「君ならどうする」

答えは出ない。

メリーゴーランド前、瑠香と日々輔は待った。何を？ 何をだろ。と瑠香は思う。それから、横目でベンチに座っている中年夫婦

を見る。中年夫婦はいつまでも待ち続けている、何を？ 当然、子供をだ。

対し、日々輔は顎を上げ、空を眺めている。何を見ているのだろうと視線を追うが、そこには何も無かった。強いて言うなら、青色の空だ。

無言の間に耐えられなくなり、瑠香は口を開く。

「いい天気ですね」

「ああ」

なんだそれは、と自分で笑う。付き合いたてのカップルの様な、ぎこちない会話だ。

「熊の格好、似合ってますね」

「瑠香坊も、兎の格好が似合ってるぜ」

「有難うございます」

「どういたしまして。ユアウェルカム」

「……」

「……」

日々輔と会話が續かないなど、初めての経験だったので、戸惑う。ほぼ無言のまま、メリーゴーランド前の一時間が過ぎた。移動だ。

そして、ジェットコースター前。客は殆ど居ない。閉園まで残り二時間と十分だが、閉園まで遊びつくすほどの目玉も無い。

目の前の鳩が一斉に飛んだ。それが合図になったのか、日々輔が口を開く。

「あの夫婦、まだ居たな」

「え、ええ。そうですね」

「いくら待っても、来ないものは来ないっつーの。諦めるよ」

「行かないんですか？」

察している事を隠す必要も無い。日々輔も、こちらが察している事に驚く様子は無い。

「無理だ」

と、日々輔は言う。「失ったものは戻らない。ありきたりだけど、そういう事だろ」

「やっぱり、許せないんですか」

「許すも何も、最初から恨んじやいない。恨む間もなかったの。俺が捨てられたのは、まだ赤ん坊の頃だよ」

やはりそういう事情だったか、と瑠香は一人唸る。

「気が付けば、養護施設に居た。皆優しかったし、辛くなんて無かった。当たり前だと思ってたしよ。だから、恨んでなんかいねえよ。これは本当だ」

「じゃあ」

「だけど、俺の親は楽屋テントで待っていてくれてるあの人で、俺の家はあの施設だよ。メリーゴーランド前の二人は、他人でしかねえよ」

そうだろ？ と日々輔が誰かに尋ねた。自分に言い聞かせている様にも聞こえたし、偶然、目の前に降り立った鳩に尋ねている様にも聞こえた。

鳩は、首を傾げている。俺が知る訳無いだろ、と言っている様だった。

兎ぐるむ熊ぐるむ

11・11らんど(後書き)

閉演まで、残り二時間と三十分。

12・兎ぐるむ

「本当に、ずっと忘れていた」

カフエテラス前。日々輔が躊躇いがちに言う。

「両親の事を、ですか」

「というよりも、人間という生物全てに、皆例外無く血の繋がった存在が居た事そのものを忘れていた。親が無きゃ、子供は存在しない事をだよ」

躊躇い、怯え、しかし話したい、弱音を聞いて貰いたい。そんな様子だった。

「俺は施設の玄関口に置き去りにされてたらしい。これが笑っちゃまうんだけど、買い物カゴに入れられたってよ」

笑うべき所でもないのに、日々輔が本当に可笑しそうに笑った。

「俺の揺り籠は、スーパ一の買い物カゴだ」と。

遠くから、子供が手を振ってきた。二人で手を振り返す。

「それから二十一年。出来るだけ親の事は考えない様に生きてきた。

その内に本当に忘れちゃって、忘れたと思ったたら、いきなりだ」

「会いたい、とでも言っ来てたんですか？」

「そう、らしい。施設の方に電話を寄越して、『日々輔の母です』

だってさ。いまさらって感じだよなあ」

「確かに、勝手ですよね」

言っってから、メリーゴーランド前で、日々輔を待つ中年夫婦の姿を思い浮かべる。自ら手放したものに、もう一度手を伸ばす。胸中にあるのは、後悔だろうか、謝罪の念だろうか。どれ程の思いであるの場に居るのだろうか。勝手だという事は承知しているのかもしれない、と思った。必死なのだ。

「会うか会わないか、最終的な判断は俺に任せるってさ」

他人事の様に、日々輔は言う。

会う気はありません。

支配人が呼びびに来た時、日々輔はそう言った。あれは、最終的な判断なのだろうか。

「まさか、俺が熊ぐるむをしているとは思ってないだろうな」

「早速使ってますね。ぐるむ」

思えば、日々輔と中年の夫婦は、二度も接近している。

「先輩も、ご両親の顔を知らなかったんですね」

「まあ、な。でも、メリーゴーランド前で見かけた時、なんとなくピンと来たんだ。確証は無かったけど」

「だから、私に調べさせた」

『誰かを待っているんですか?』と聞くんた。

「瑠香坊ならどうする?」

日々輔が、自嘲気味の乾いた笑い声を上げながら、言う。「どうすればいいと思う?」

「私には判りません」

「多分、誰にも判りません。と瑠香は付け足す。「だけど」

「だけど?」

「私、先輩の事、好きですから」

自分の口から出た言葉に、瑠香は驚く。何を言っているんだ。と思いつつも、結局の所、自分の胸の内を吐露する。

「例え先輩がどんな決断を下しても、私は傍に居ますよ」

呆気に取られる日々輔を無視して、瑠香は続ける。

「兎と熊は、いつも一緒なんです」

それが答えじゃ駄目ですか? 瑠香は、震える声を必死に絞り出す。

兎ぐるむ熊ぐるむ

12・兎ぐるむ（後書き）

次で最後です。最後までお付き合い頂ければ幸いです。

13・熊ぐるむ

閉園まで残り十分。大勢の人々が踏み仕切る足音が聞こえる。夢は終わり、現実に向けて歩いていく。流れていく。様々な人が、居た。風船をもった若い夫婦。その子供。老人。恋人同士。友達同士。この、寂れた遊園地のどこにこれほどの数が居たのだ、と、首を捻りたくなる。

楽屋テントから、メリーゴーランドを覗く。中年夫婦は、日々輔の両親はまだそこで待っていた。赤い風船がゆらゆらと揺れている。あの二人を最初に見かけたのは、十二時頃だっただろうか。もしかしたらもつと早くから居たかも知れない。なんにせよ、七時間以上は、あの場に居る。

いや、七時間がなんだと言うのだ。と瑠香は思う。

日々輔は二十一年も待ったのだ。
忘れていた。と言うのが本心とも思えない。

「もう閉園だよ」

支配人が辛そうに言う。「残念だけど、閉園になったら、あの二人には出て行って貰わなくちゃならない」

「そうですね」

「それに」

と、支配人が言う。「後五分もしたら、着ぐるみ組は出口に行かないと」

閉園の際、兎と熊は出口でも風船を配らないといけない。「またどうぞ」と子供達に手を振る。それが仕事だ。

「判ってます」

と、日々輔は言う。「会う気は、ありません」

気が付けば、日々輔が隣に並んでいた。笑顔の熊の下で、どんな表情をしているのだろうか。後ろには、支配人、朱花、賀古がそれぞれ表情で並んでいる。「会うべきだ」と言う人間も、「会わない方がいい」と言う人間もない。全ては日々輔に委ねられている。「くまー」

と、声が聞こえた。見ると、メリーゴーランドの前を横切る親子の姿があった。先の迷子の子と、その親だ。「くまー」と叫ぶ。日々輔がその子に向けて手を振った。母親が頭を下げた。

「珍しい話じゃない」

その光景を見ながら、日々輔は言う。

「俺の弟達は、皆俺と同じ境遇だよ。あの子くらいのやつも居るし、もっと小さいやつも居る。事情は様々だけど、皆親と会えない」

日々輔の、弟達、妹達。

「ゴミ箱に捨てられてた奴も居る。信じられるか？ 生まれて直ぐゴミ箱だぞ、訳がわかんねえよ」

日々輔が頭を抑えた。正確には、着ぐるみを着ているので、熊の頭だが。

「それなのに、アイツ、親に会いたいって」

泣いている事を隠そうともしない。

「おれ、俺だけ、あいつ等を置いて、親に会って良いのかな」

「え？」

「二度と会えない奴も居るんだ。それなのに、なんでだよ、なんで俺なんだよ。俺じゃなくてもいいじゃねえかよ。ふざけんな。俺はもう良かったんだ、諦めてたんだよ。まだ、諦めてない奴が居るじゃねえかよ」

会いたい。一斉に声が聞こえた気がした。子供の声だ。様々な表情が頭を過ぎる。まだ見ぬ、日々輔の弟や妹達だ。施設で親を待つ、子供達の顔だ。

「会いたい」日々輔が、小さな声で言った。「怖い」とも。

「時間だね」

と、支配人が風船を持ってきた。「出口の方、頼むよ」

「あ、はい」

思わず受け取ってから、日々輔の方を見る。メリーゴーランドを見たまま、動かない。「先輩」呼んでも、返事は無い。仕方なく、無言で手渡そうとするが、風船は日々輔の手を擦り抜けた。

「あ」

風船が、一斉に飛んだ。赤、青、緑、黄、様々な色が、空の黒さに溶けていく。その場に居た誰もが、空を見上げた。

「やつちやった……」

怒られるだろうか、と不安になったが、支配人は、「こういうのもいいね」とにこやかに笑うだけだった。

空に気を取られていると、足に何か当たる感触があった。「あ」と声を上げる。熊の頭だった。「先輩、熊の頭」

前を見る。身体だけが熊の日々輔が、のしのとメリーゴーランドに向かって歩いていた。それを見て中年の夫婦が腰を上げた。泣き出しそうになりながらも、結局は泣き出すに違いないのだが、今の所は互いの手を強く握って耐えている。

「ねずみ」

瑠香は言う。

「ねずみの着ぐるみが余ってましたよね」

「そうだね」

支配人は全てを了承した。

「いつてらっしゃい」

賀古が背中を押す。

「俺がねずみか」

朱花が立ち上がる。

「出口の方、お願いします」

兎はメリーゴーランドに向かう熊を追って走った。

13・熊ぐるむ（後書き）

ここまで読んでくださった方に心から感謝です。有難うございました。

主人公が女性だったり、好きの嫌いのという話が混じってみたり、一日一回更新してみたりと、色々と慣れない事に挑戦し、それが非常に勉強になりました。

これを糧に、次も頑張らせて貰います。

それではまた。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6643b/>

兎ぐるむ熊ぐるむ

2008年8月29日18時59分発行